

2027年国際園芸博覧会 基本計画案・概要版

花や緑との関わりを通じ、自然と共生した持続可能で幸福感が深まる社会の創造を提案、
横浜から明日に向けた友好と平和のメッセージを発信します。



開催目的

気候変動等の世界的な環境変化を踏まえ、我が国が培ってきた**自然環境が持つ多様な機能を暮らしに生かす知恵や文化**について、その価値を再評価し、**持続可能な社会の形成に活用**するとともに、「**国際的な花き園芸文化の普及**」「**花と緑があふれ農が身近にある豊かな暮らしの実現**」「**多様な主体の参画**」等により**幸福感が深まる社会を創造**することを目的とした**未来志向の国際園芸博覧会**を目指します。

開催意義



国際園芸博覧会

SDGs達成に貢献し、その先の社会も見据えた日本モデルの提示

- ・植物の世界と人とのつながりや自然との共生の重要性の発信
- ・自然資本と技術を織りなすことによる新たな産業の創出
- ・花や緑を都市に融合させた新しい自然観を次世代へ提示

博覧会後の 更なる展開

国際園芸博覧会の理念の継承・水平展開

テーマ・サブテーマ

時代認識

地球規模の課題：地球温暖化、生物多様性の損失、自然災害、感染症、食料危機等

テーマ 幸せを創る明日の風景
~Scenery of the Future for Happiness~

サブテーマ

テーマ実現の切り口

自然との調和

緑や農による共存

新産業の創出

連携による解決

全体概要

名称 : 2027年国際園芸博覧会
(International Horticultural Expo 2027, Yokohama, Japan)
開催場所 : 旧上瀬谷通信施設 (神奈川県横浜市)
開催期間 : 2027年3月19日(金曜日)~9月26日(日曜日)
博覧会区域 : 約100ha
参加者数 : 1,500万人(地域連携やICT活用などの多様な参加形態を含む)
(有料来場者数 1,000万人以上)

<資金計画>

会場建設費 320億円
財源：国、地方自治体、民間による負担
支出：出展関係建設費、サービス・管理施設整備費、庭園・花壇・緑地の整備費等
運営費 360億円
収入：入場料収入、物販収入等
支出：事業運営、会場管理、来場者対応、広告宣伝費、庭園・花壇・緑地の維持管理費等



横浜市・旧上瀬谷通信施設について

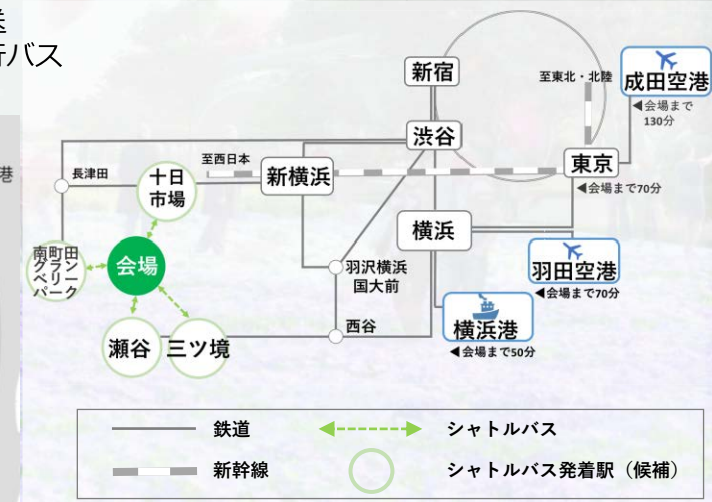
横浜市は、1859年に国際港として開港以降、園芸植物の玄関口となり、ユリを代表として数々の植物が海外へ輸出されるとともに、バラやチューリップなどの西洋の花の輸入の先駆けとなるなど、日本の花き貿易の先進地となり、我が国の優れた植物や園芸文化を発信し続けてきました。

会場は横浜市の郊外部(旭区・瀬谷区)に位置する旧上瀬谷通信施設であり、2015年に米軍から返還された約242haの広大な土地で、そのうち約100haが博覧会区域となります。長年にわたり土地利用が制限されてきたことから、農地や緩やかな起伏の草地など豊かな自然環境が広がり、南北に流れる相沢川、和泉川の源流部、谷戸地形等の貴重な自然資本が残っています。



輸送アクセス

- ・周辺各駅からのシャトルバスによる輸送
- ・空港や主要ターミナル発着場からの直行バス
- ・会場外駐車場を確保「パーク&ライド」



スケジュール

2022 2023 2024 2025 2026 2027 2028

- ・BIE認定、基本計画策定
- ・参加国招請開始・会場整備着工
- ・チケット発売
- ・開会

幸せを創る明日の風景

～Scenery of the Future for Happiness～



祝祭感あふれる美しい花々、麗しい水と緑、目にする全ての風景が来場者を魅了します。また、食と農、交流などの魅力あるコンテンツにより自然と共にある暮らしを発信します。

博覧会の象徴・圧倒的な緑による自然の体感

シンボル展示

- 博覧会の象徴として、展示・建築が一体となり、多くの人々を惹きつけ、テーマ・サブテーマを伝える



バイオフィリア展示

- 都市化により人間と自然との距離が拡大する現代社会で、来場者一人ひとりが「自分にとってのバイオフィリア※」を発見できるような展示を展開

※ 人間が自然と交わりたいと望む本能的な欲求

日本の植物資源展示

- 植物の遺伝資源、伝統文化・技術、日本人の植物を使う知恵等に関する内容を展示
- 開港時から植物貿易を担い園芸植物の世界との窓口を担ってきた横浜から、生物多様性や自然との共生の重要性等を世界に向けて発信

技術の向上 産業の発展・拡大

コンペティション

- 庭園及び花き等のコンペティションに加え、本博覧会独自企画のコンペティションを実施
- 需要拡大・輸出拡大等による我が国の花き園芸・造園産業の発展を目指すとともに、多様な産業界が連携する枠組み等も検討



産官学民連携により目指すべき未来像を具現化

博覧会協会テーマ事業 “Village”

- 博覧会協会が設定する複数のテーマに応じ、賛同する民間企業や教育機関、研究機関、市民などが共創して、参加・交流・体験等の多様なコンテンツの集合体やコミュニティを提供

Villageテーマ（例）

緑×DX※



※デジタルトランスフォーメーション

食・農×循環



包摂×学ぶ



Park Pavilion（パークパビリオン）

- 博覧会の趣旨に賛同する企業のビジョンを、特徴ある魅力を備えた庭園と共に表現し、新しい風景づくりを企業と実施

コンセプト

参加主体が目指す指針（基準となる考え方）

環境共生社会への挑戦

自然資本と
技術の融合

風景・景観の最適化
(リ・デザイン)

多様な主体の参画によりテーマを体現

庭園

- 博覧会のテーマを体現する主催者庭園の他、世界の国、自治体、企業・団体、市民団体等から各国・各地の特徴ある庭園が出展
- 各国から出展される国際出展庭園では、来場者が各国の花や緑のある暮らしや文化を五感で体感しながら回遊できる空間を創出



自然資本による 都市の課題解決

グリーンインフラ

- 緑陰や風の道の形成、園路広場における雨水貯留、蒸散作用効果、良好な緑の創出による景観づくりなど、居心地の良いウォークアブルで魅力的な空間を創出



身近な食を通じて 持続可能な暮らしを提案

食体験事業 Farm to Table Street

- 食の展示として、会場の大通りに多種多様な飲食・物販施設を配置し、企業や地区内外の農家と連携。来場者が旅をするように世界中の風景・食・文化、人とのふれあいを五感で楽しむシーンを創出



2022年7月現在
【会場イメージ】